

0～5歳児における異年齢児との人間関係の発達的变化 —0～2歳児との関わりに焦点を当てて—

石川 洋子*

Developmental Changes in Children 0-5 Years of Age in Terms of Their Relationships with Peers of Different Ages: Focusing on the Peer Relationships of Children 0-2 Years of Age

Hiroko ISHIKAWA

要旨 異年齢の子どもの交流をとくに0～2歳児との交流に焦点を当て、子どもの言動やその関わり、関わる方法などの発達的变化を分析した。0～2歳児でも、他の年齢の子どもやその行為を見つめたり、物のやり取りや模倣などをしており、関わりへの興味、関心は思った以上にあり、行動もしていた。3～5歳児の低年齢児との関わりは、相手に言葉をかけたり、使い方などをやって見せたりなど、プラスの関わりを多く持っていた。

異年齢の子どもたちの関わりを発達的に見ると、相手を見たり、相手の持つ物やしていることを見る段階があり、次に模倣をするようになり、同じ動作などを通して相手と関わっていき、相手もそれを許したり受け入れたりするという段階があった。その後、物や遊びなどの行為を介したやりとりをしたり、物の使い方をやってみせたりしながら、相手の立場に立って相手に応じた行為をするようになり、言葉を使ったやりとりへと移行していった。そのための保育者の関わり的重要性や年度を追った体験の積み重ねの重要性を指摘した。

キーワード：異年齢保育 発達 0～5歳児 人間関係 社会化

I 研究目的

子どもの育ちは、身の回りにいるさまざまな人々の中で達成されていくが、なかでも、子ども同士の間関係は、その影響が大きい。子どもは、相手が自分と同じ子どもであることを認識し、さまざまに考えながら関わっている。とくに相手が異年齢の子どもであれば、その関わりは強く意識されたものとなり、そこから得られるものは大きいように感じられる。

最近、異年齢保育の重要性が指摘されるように

なったが、異年齢保育の保育方法や環境整備などに焦点がおかれがちである。また、異年齢保育のメリットとしては、一般に、低年齢児にとっては年齢の高い子どもがよきモデルとなること、高年齢児にとっては思いやりの気持ちが育つことなどが挙げられている。しかし、子どもたちを見ていると、異年齢児間における人間関係は、もっと複雑であり、相互によい影響を与え合いながら、社会化や認知の発達、考える力なども促しているように思える。

子どもの社会化の発達に関する研究は多い。鹿子木¹⁾は、発達早期における向社会性に関する

* いしかわ ひろこ 文教大学教育学部心理教育課程

一連の研究を概観しながら、ヒトの向社会性は生来的な性質を有すること、それ以降は発達とともにその性質が変容すると述べた。伊藤²⁾は、幼児の向社会的行動に他者の感情解釈がどのような影響を及ぼしているかを検討し、他者の適切な感情の推測と向社会的行動が密接に関連していること、表情と状況が矛盾した場面でも感情解釈の提示によって向社会的判断・行動が促進されることを示した。さらに伊藤³⁾は、向社会性についての認知と遊び場面での向社会的行動との関連を検討し、向社会的行動を行っているという自己評価への認知と実際の遊び場面での向社会的行動とが関連していることを示した。

また、子どもの人間関係構築においては、遊びそのものの重要性や子どもたちの媒介となる物や場の重要性を指摘する研究もある。須永⁴⁾は、友だちとの関わり方にむずかしさを持つ子どもの事例の関係構築の道すじを詳しく分析し、自分なりのやり方で関わり方を見つけていく姿を示し、また「つながるための試行錯誤」の存在を示唆した。そして、「あそびそのもの」を媒介として他者との関わりが生まれるという現象を指摘している。無藤⁵⁾は、幼児同士の付き合いの成立過程を分析し、共通の対象への注意の成立や両者の場と活動を結ぶ何かがあることが、一緒であるという感じや協同の進展を支える上で大事であることを述べている。さらに、同じことをすること、視線を合わせ、笑い合うことなどが協同性の基盤を形成し、その中でも「物」の介在の重要性⁶⁾も指摘した。齋藤⁷⁾は、1～2歳児が仲間が使っている物への関心が高く、それが物を介する仲間との関わりにつながっていること、仲間と同じ物を持つことを示し、同じ場を共有すること自体が仲間との関わりを結び付けている可能性も示唆した。

砂上・無藤⁸⁾は、幼児の遊びにおける場の共有と身体の動きについて検討し、子どもが作った場の使い方を教えること／教えられることは、遊びへの仲間入りの承認や働きかけとして機能すること、子どもが作った場においては、その場の使い

方は場を作った／先に場にいた子どもによって優先的に決定されることなどを指摘している。そしてこうした原則が実際の遊びの中で具体的な身体の動きとして実践されること、その意味で、子どもが場を共有し他者と一緒に遊ぶということは、人との関わりを支える原則を身体を通して実践することであり「身体知」と呼ばれるものであるとした。

一方、子どもの発達を支える手立ての一つともいべきものに模倣がある。模倣の重要性を指摘する研究は多い。山田⁹⁾は、実践事例を通して、差し出されたものを受け取ることに抵抗があった子どもにとって、まねることが主体的でありつつ、相手の行為を受け取ることでできる方法であり、まねることで自分の殻を破っていたと分析した。そして、「まねる」とは、人との関係を広げようとすることであり、自分の可能性を開いていこうとするのであったと指摘している。大桑¹⁰⁾は、0～2歳児の仲間関係における模倣の役割について、観察をもとに模倣の機能を①学習としての模倣、②コミュニケーションとしての模倣、③表現としての模倣の3つに分類し、模倣が様々な状況で複数の機能を果たし子どもの心身の発達を促進させているとしている。鈴木¹¹⁾は、模倣の役割について事例を検討する中で、模倣が他者との身体的コミュニケーションを活性化させる力になるとしている。

異年齢の子どもの関わりに関する研究に、松永・郷式¹²⁾の幼児の「心の理論」の発達に対するきょうだいと異年齢保育の影響を検討したものがある。3～5歳児の幼児にとっては異年齢の子どもの接触は、サリーとアンの課題と同型の誤信念課題で測定されるような特定の「心の理論」の獲得に一定の促進的な影響を与えることを指摘している。

子ども同士の関わりが子どもの発達に与える影響を指摘するこれらの研究をみると、社会化の発達の様相を探ることや子どもにとっての遊びや物の意味を探ること、模倣を詳細に検討することな

が必要と思われた。

そこで本研究では、異年齢保育の中で、とくに低年齢の子どもとの関わり方に焦点をあて、子どもどうしを媒介する物や模倣にも留意しながら、子どもたちの人間関係の様相やその進みを検討した。

II 研究方法

1 研究対象

筆者はここ数年、東京都にある区立K子ども園において、保育者たちと、保育方法や保護者対応に関して研究を重ねてきた。

K子ども園は、区立幼稚園閉園に伴い、区立保育園が、0～2歳児の園舎と3～5歳児の園舎という分園型子ども園として再出発した園である。

両方の園舎は200mほど離れており、徒歩で1～2分程度ではあるが、園舎が分かれているという状況を補うべく、保育者は園運営や保育方法などについて、2013年度から検討を始めた。その中で、異年齢児の交流の必要性和重要性も痛感し、2014年度からは、本格的な研究を始めた。本研究では、この園の0～2歳と3～5歳の子どもの質的交流を観察し分析した。

2 研究方法

本研究では、0～5歳児の異年齢児の交流のなかでもとくに0～2歳児との関わりに焦点を当てた。

研究方法は、異年齢児との交流の場面において、とくに低年齢児との関わりを取り上げ、交流のようすをビデオにより記録し、各事例ごとに分析検討した。

本園の保育者は、この交流の中で、異年齢の子どもと関わることを強制しないこと、あくまでも自然な形で関わることを重視して保育を行っている。またビデオ撮影も保育者が行い、できるだけ子どもたちに違和感を感じさせないようにした。

そして筆者が、その録画されたものを園内で記録した。記録の際には、子どもの年齢やその場の

状況などを保育者と確認をしながら行った。

記録されたものは、以下の14項目で分類、分析した。

1. 相手を見る（相手を見つめるのみの行為）
2. 相手の持つ物やその行為を見る
3. 相手に近づく
4. 笑う
5. 相手に声や言葉をかける
6. 相手をまねる
7. 相手にやって見せる
8. 相手に手を伸ばす
9. 相手にふれる、なでる
10. 相手に物をわたす、もらう
11. その他の相手と関わりのあるプラスの行為
12. その他の相手と関わりのあるマイナスの行為
13. 相手がいても関わりのない言動
14. 相手から離れる行為

ビデオ撮影の日時は、2014年6月～2016年8月である。記録や分析の中では、クラスごとに年齢が記載されているが、月齢などにより子どもの実年齢は少し高くなっている。

III 結果と考察

1 子どもの年齢と事例数

今回の研究で得られた事例数は、合計119件であった。関わりがあった子ども同士の年齢の内訳は、表1のとおりである。とくに各年齢で、0歳との関わりが多い結果であった。

各事例における関わりの時間は、2秒から5分18秒、平均45.4秒（SD48.28）であった。

表1 関わった相手の年齢と事例数

年齢	0	1	2	3	4	5	計
0歳		16	4	29	7	10	66
1歳			2	0	17	16	35
2歳				10	2	6	18
3歳					0	0	0
4歳						0	0
合計							119

2 異年齢の子どもとの関わり

異年齢の子ども、とくに低年齢児との関わりに焦点をあて、ビデオによる撮影、分析を行い、それぞれの言動を14の項目で分類した。各年齢ごとに相対的にどの項目が高くなっているのかを見たものが図1～図6である（複数回答から見たもの）。

図を見ると、子どもたちは異年齢児間で、多くの関わりを持っていたことがわかる。相手と何ら

かの関わりのあるプラスの項目に分類される言動が、0～2歳児において約90%あり、3～5歳児においても76～83%程見られた。子どもたちはいつもと異なる小さな相手、あるいは大きな相手を、思った以上に意識し行動していた。

相手と関わるプラスの行為の内容は、相手を見る、相手の物や行為を見る、相手に声や言葉をかける、相手にふれる、相手に物をわたすなどがあり、年齢ごとに特徴が見られた。

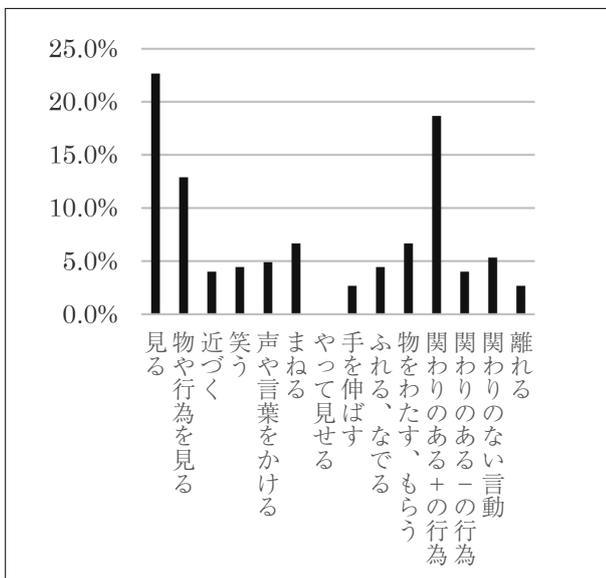


図1 0歳児の異年齢との関わり

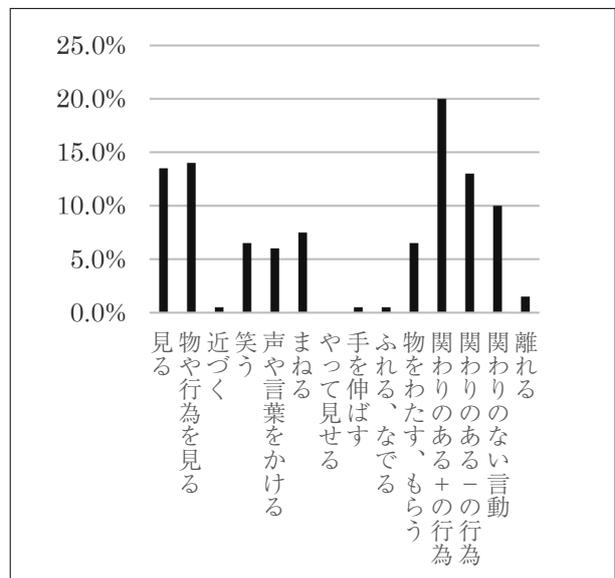


図2 1歳児の異年齢との関わり

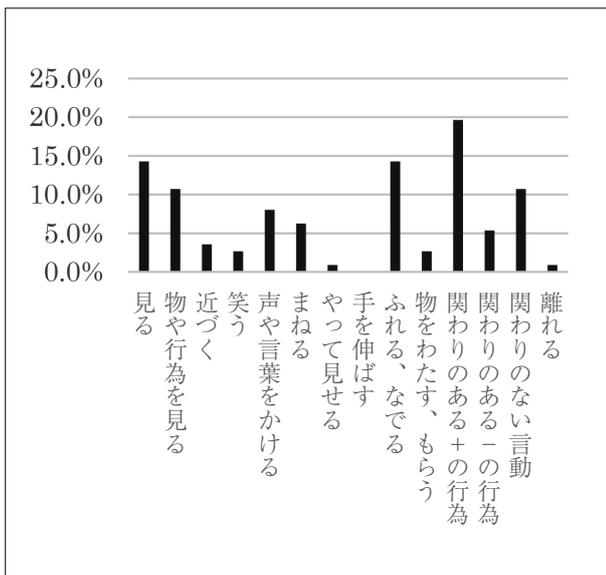


図3 2歳児の異年齢との関わり

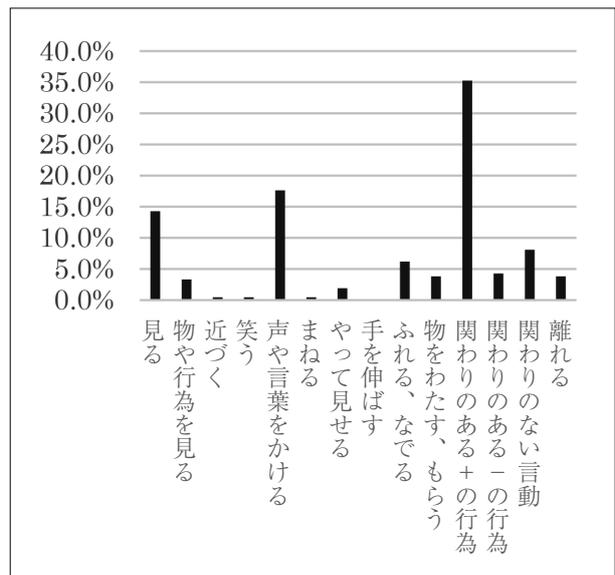


図4 3歳児の異年齢との関わり

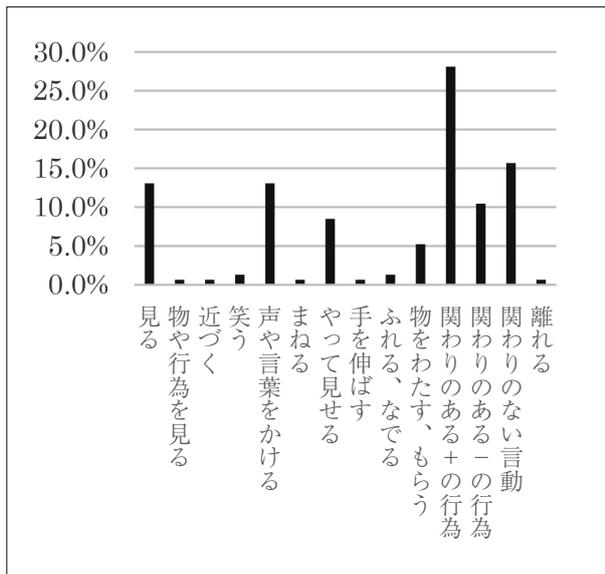


図5 4歳児の異年齢との関わり

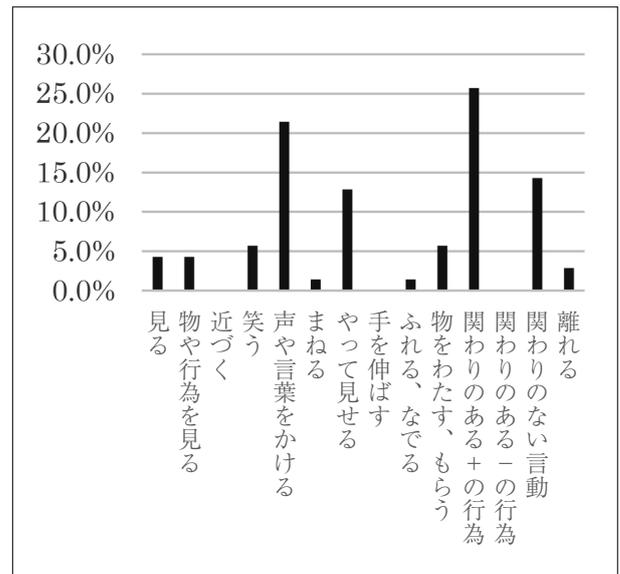


図6 5歳児の異年齢との関わり

3 0～2歳児の異年齢児との関わりの特徴

0～2歳児の異年齢児との関わりの特徴として、次のようなものがあげられる。

1, 相手を見る

相手を見つめる行為は、ほとんどの年齢で見られたが、とくに0歳児で相対的に多く見られた。人との関わりは、相手を見つめるところから始まるものであろう。

2, 相手の持つ物や相手の行為を見る

相手が持っている物や相手のしている行為自体を見ることが多いことも、0～2歳児の特徴であった。相手が何をしているのか、それがどのような意味を持つのかを理解しようとしているかのようであった。

3, 笑う、相手に声や言葉をかける

笑う行為や相手に声や言葉をかける行為も0歳から見られた。

4, 模倣する

相手をまねる行為も、0～2歳児のすべての年齢で見られた。

5, 相手にふれる

相手に手を伸ばす行為は0歳児で始まり、相手にふれる行為は、とくに2歳児で多かった。コミュニケーションの手段として用いられている

ようであった。

6, 相手に物を渡す、物をもらう

相手に物を渡す、相手から物をもらうといった物を介しての関わりの行為は、0～2歳児のすべての年齢で見られた。これも大切なコミュニケーションの手段となっていた。

7, その他、相手と関わりのあるプラスの行為には、相手の物に手を出す、相手についていくといった行為があった。0歳児の時点から相手と関わるさまざまな行為を行っていた。

8, 相手と関わりのあるマイナスの行為

相手と関わりのあるマイナスの行為には、「相手をたたく」「相手と押し合う」などがあり、とくに1歳児でやや多い結果であった。しかし全体的には、予想されたほど多くはなかった。以上の結果を見ると、0～2歳児においては、他の年齢の子どもを見つめたり行為を見つめたり、模倣や物のやり取りなどをしており、関わりへの興味、関心は思った以上にあり、行動もしていると言える。

4 3～5歳児の低年齢児との関わりの特徴

3～5歳児の低年齢児との関わりの特徴としては、次のようなものがあつた。

1. 相手に声や言葉をかける

相手を見る行為は、0～2歳児と同様に見られたが、単に相手の物や行為を見る行為は、3歳になると見られなくなっていた。一方、相手に声や言葉をかける行為が3歳以上になると、とくによく見られるようになった。3歳になり、言葉を自由に使えるようになる一方、他の行為をしながら言葉をかけるということもできるようになっていた。

2. 相手にやってみせる行為

物の使い方や遊び方を自分よりも年齢の低い子どもたちにやって見せる、説明するという行為が、とくに4、5歳児で見られた。相手が必要なことを察し、相手のために、相手に応じながら示してやるという行為は、異年齢交流の中で自然に行われていた。

3. 相手と関わりのあるプラスの行為

3～5歳児における相手と関わる行為には、0～2歳児と同様に、相手にふれる、相手に物をわたす・もらう、という行為があったが、その他に、「相手の手を引く」「物を相手の側にむけてやる」「相手の見ている方を一緒に見てやる」など、相手の立場に立って相手に応じた行為をするようになっていた。

4. 相手と関わりのあるマイナスの行為

「相手をたたく」や「相手の物を押し返す」など、低年齢児に対するマイナスの行為は、今回の調査では4歳児においてやや多く見られた。保育者が間に入った事例もあった。

5. 相手と関わりのない言動

低年齢児がそばにいても、あるいは低年齢児からの働きかけがあってもそれに関わらず、自分の行為だけをしている事例が、4、5歳児で見られた。

以上の結果を見ると、3～5歳児の低年齢児との関わりは、言葉をかけたり、物の使い方をやって見せたりなど、プラスの関わりを多く持っていた。一方、自分の遊びに没頭し、関わりをもたないことも見られた。

5 模倣と発達的变化

各年齢の分析の中で、模倣行為にも発達的な特徴が見られた。

「まねる」行為は、0～2歳児に多く見られたが、一部3歳以上児にも見られた。その具体的な内容は次のようなものである。

・事例9 「0歳児が1歳児をまねる」

1歳がガラスごしに0歳を見る。0歳が1歳に向かってガラスをたたく。1歳がガラスごしに手をついている箇所、0歳がまねて手をおいて合わせる。

・事例14 「0歳児が4歳児をまねる」

4歳が0歳に振るおもちゃをわたす。0歳がもらう。4歳が取り返して0歳に振って見せる。4歳が0歳にわたす。0歳がまねてそれを振ってみる。4歳がおもちゃを相手方に向けて、もう一度わたす。4歳がまた振って見せる。0歳もまねて振る。0歳が持っている手を4歳と一緒に持って振ってやる。

・事例10 「1歳児が0歳児をまねる」

0歳がガラスごしに1歳に「あーあー」と言う。1歳も0歳に「あーあー」と言う。

・事例68 「1歳児が2歳児をまねる」

2歳が1歳にペットボトルを使って飲ませるふりをする。1歳は何度も飲むふりをする。

・事例66 「2歳児が5歳児をまねる」

5歳が2歳のカップにペットボトルから色水を入れてやる。2歳はまねて5歳のペットボトルに色水を戻そうとする。

・事例89 「3歳児が0歳児をまねる」

0歳が帽子を振り回しながら歩いている。0歳の歩きに添って3歳が歩く。・・・3歳が0歳をまねて帽子を振り回す。

・事例85 「4歳児が1歳児をまねる」

1歳が園庭のイスの上にダンブを置く。それをまねて4歳が同じイスの上にダンブを2台置く。

・事例51 「5歳児が1歳児をまねる」

プール遊びで、1歳が水の中で舌を出している。それを見て5歳が「べーっ」とまねて舌を出す。それを見て1歳が笑う。

以上のように、模倣行為は、0歳児から見られた。瞬間的に相手と同じ行為をする能力を私たちは持っていることが感じ取れた。

また、今回の事例では、1歳を過ぎると、単なる模倣ではなく、相手の行為の意味を理解し、それをまねようとするようになっていた。3歳以上になると、相手と関わるための手段として、または遊びを広げる手段としてまねたり、コミュニケーションの手段としても使っていた。

相手の文脈の中で相手の立場や相手の模倣行為を見ながら、そこに遊びをのせていくことは、3歳以上児にとっても共感性や思考力も求められ、大きな発達を促すこととなる。これらの結果を見ると、異年齢の子どもが互いに関わることは、どちらの年齢の子どもにとっても大きなメリットがあることを指摘できる。

6 異年齢の関わりの発達の様相

本研究事例から、異年齢の子どもたちの関わりの様相を発達的に見ていきたい。

・事例114 「2歳児と4歳児」

たらいで水遊び。互いに別々に遊んでいる。2歳が4歳をちらっと見る。もう一度2歳が4歳のしていることをちらっと見る。4歳が2歳をちらっと見る。

・事例25 「0歳児と3歳児」

0歳と3歳が並んで座っている。3歳が袋に水筒を入れる。0歳がそれを見ている。3歳が0歳をちょっと見る。0歳は3歳のしていることをじっと見ている。

・事例32 「0歳児と3歳児」

3歳がピアノカを吹いている。0歳がピアノカにさわり、ふたを閉めてしまう。3歳がふたをあけてまた吹き始める。0歳も一緒に鍵盤にさわる。0歳が両手を鍵盤に乗せたまま、音を出したまま、3歳はそのまま吹いている。3歳が0歳を見る。0歳は3歳を笑って見ている。

・事例77 「1歳児と4歳児」

4歳が筒の中にスコップで砂を入れる。1歳がまねてそこに砂を入れる。4歳が自分も入れようとして1歳が入れ終わるまで待つ。・・・4歳がスコップで砂をぺたぺたす

る。1歳がそれをまねてぺたぺたする。4歳が1歳に「はい、いいよ」と話しかける。1歳が4歳を見る。

・事例74 「1歳児と4歳児」

4歳が1歳にシールを貼って見せる。4歳は1歳がシールを貼りやすいように、台紙を反対側にしてやる。1歳が貼る。

・事例65 「2歳児と5歳児」

5歳が2歳のカップに色水を入れてやる。2歳はいれてもらう。5歳が声をかけ、2歳がカップを差し出す。5歳がそこに色水を入れてやる。

上記の事例を見ると、異年齢の子どもたちの関わりは、まず、相手を見たり、相手のしていることをじっと見る段階がある。次に模倣するようになり、また、相手に手を出し関わっていき、相手もそれを許す、受け入れるという段階がある。その後、物や行為を介したやりとりや物の使い方をやってみせたり、相手の立場に立って相手に応じた行為をするようになると同時に、言葉を使ってやりとりをするようになっていた。

しかしそのためにも、興味・関心が持てる物や遊びの存在が必要であり、自分の行為に介入してくる相手の存在やその行為を許す落ち着き、その場の温かい雰囲気などが必要であると思われた。

7 保育者の存在の重要性

異年齢の子ども同士の間では、保育の内容や保育者の存在は重要となる。子ども同士のトラブルへの対処やその後のフォローが必要な事例もあった。

・事例86 「1歳児と4歳児のトラブル」

4歳がイスの上にダンブを2台置く。1歳もイスの上にダンブを2台のせる。2人でダンブの場所取りで押し合いになる。・・・4歳が1歳のダンブを1台落とす。・・・1歳が落とされたダンブを振り上げ、それで4歳をたたく。4歳もダンブ同士でたたく。1歳が4歳を2台のダンブでたたく。4歳が手で1歳の頭をたたく。1歳が泣きだす。保育者が2人を引き離す。

その後落ち着いた4歳児に保育者が声をかけると、子どもは自分の行為を振り返り、「自分で謝ることができる」と自ら言っていた。

保育者の適切な援助とフォローは、その子自身の成長への援助になると同時に、次の異年齢児との関わりへの助けともなっていた。

8 体験が積み重なること

本園における異年齢児の交流の研究は、4年にわたっている。交流の体験は子どもたちの中に、年度を追いながら積み重なっていた。

・事例116 「3歳児と2歳児の関わり」

2歳が3歳が段ボールで作ったシャワールーム遊びをじっとみている。順番が来て2歳がシャワールームに入ると、他の3歳が寄ってきて使い方を説明し手伝う。・・・シャワールームを出た後、3歳が2歳の手を取って連れて行こうとするのを2歳は拒否する。3歳はあきらめずに声をかける。3歳は2歳の見ているパズルの方と一緒に見てそれに応じてやる。3歳と一緒に連れて行こうとすると、2歳は手を振りはい一人で行動するが、3歳はそれに応じてやり、その後、やりたがっていたパズルを出してやる。

本事例116は8月初めのことであるが、この日は、3歳児が2歳児と関わる最初の日である。それにも関わらず、3歳児は相手に根気よく応じてやっている。保育者によると、前年度、自分が3歳以上の子どもたちに関わってもらった体験を覚えており、それを生かすことができているのだろうということであった。

意識的な異年齢の交流は、単年度だけではなく毎年なされることにより、子どもの中に積み重なり、複合的に育ちをはぐくんでいく。そのためにも園全体として、保育課程、教育課程の中で異年齢保育について考えていくことが、子どものよりよい育ちにつながっていくと思われた。

IV まとめ

異年齢の子どもの交流をとくに0～2歳児との交流に焦点を当て、子どもの言動やその関わり、関わる方法などを分析した。

0～2歳児でも、他の年齢の子どもを見つめたりその行為を見つめたり、物のやり取りや模倣などをしており、関わりへの興味、関心は思った以上にあり、行動もしていた。3～5歳児の低年齢児との関わりは、相手に言葉をかけたり、使い方などをやって見せたりなど、プラスの関わりを多く持っていた。

異年齢の子どもたちの関わりを発達的に見ると、相手を見たり、相手のしていることを見る段階があり、次に模倣をするようになり、同じ動作などを通して相手と関わっていき、相手もそれを許したり受け入れたりするという段階があった。その後、物や遊びを介したやりとりをしたり、物の使い方をやってみせたり、相手の立場に立って相手に応じた行為をするようになると同時に、言葉を使ったやりとりをするようになっていた。

しかしそのためにも、興味・関心が持てる、物や遊びの存在が必要であり、自分の行為に介入してくる相手やその行為を許す子ども自身の落ち着きやその場の温かい雰囲気が必要であると言える。また、保育者の適切な援助とフォローは、その子自身の成長への援助となり、さらには、次の異年齢児との関わりへの助けともなると思われた。

また、異年齢の意識的な交流が毎年なされることにより、子どもの中にそれが積み重なり、複合的に育ちをはぐくんでいた。そのためにも園全体として、保育課程、教育課程の中でこれを意識的、意図的に考えていくことが、子どものよりよい育ちにつながっていくと思われた。

謝辞

本研究に熱心にご協力いただきました新宿区立柏木子ども園の子どもたちと先生方に、厚く御礼を申し上げます。

- 1) 鹿子木康弘「発達早期における向社会性：その性質と変容」発達心理学研究, 2014, 第25巻第4号, 443-452
- 2) 伊藤順子「幼児の向社会的行動における他者の感情的解釈の役割」発達心理学研究, 1992, 第8巻第2号, 111-120
- 3) 伊藤順子「幼児の向社会性についての認知と向社会的行動との関連：遊び場面の観察を通して」発達心理学研究, 2006, 第17巻第3号, 241-251
- 4) 須永美紀「友だちとの関係構築過程における『あそび志向』段階の可能性—相手と『つながる』ということに注目して—」保育学研究, 2005, 第43巻第1号, 39-50
- 5) 無藤隆「幼児同士の付き合いの成立過程の微視発生的検討」人間関係学研究, 1996, 第3巻第1号, 15-23
- 6) 無藤隆『協同するからだとことば—幼児の相互交渉の質的分析—』金子書房, 1997
- 7) 齋藤多江子「1～2歳児の仲間と物とのかかわり—『仲間と同じ物に関心をもつ』行為に着目して—」保育学研究, 2012, 第50巻第2号, 6-17
- 8) 砂上史子・無藤隆「幼児の遊びにおける場の共有と身体の動き」保育学研究, 2002, 第40巻第1号, 64-74
- 9) 山田陽子「N子にとって『まねる行為』の意味するものについて」保育学研究, 1998, 第36巻第2号, 94-98
- 10) 大桑萌「0～2歳児の仲間関係における模倣の役割」保育学研究, 2014, 第52巻第2号, 28-38
- 11) 鈴木裕子「幼児の身体活動場面における模倣の役割に関する事例的検討」発育発達研究, 2009, 第42号, 24-32
- 12) 松永恵美・郷式徹「幼児の『心の理論』の発達に対するきょうだいおよび異年齢保育の影響」発達心理学研究, 2008, 第19巻第3号, 316-327